

漢代の粉末製造法「治」法

について

赤堀 昭

生薬は乾燥などの簡単な加工処理を施しただけの天産物である。したがって使用に際しては、目的に応じて更に手を加える必要があるが、中国伝統医学の処方には掲げて粉にするとか、適当な大きさに切って煎出するといった指示のあるのが普通である。治法もそのような手法の一つであるが、従来知られていた医学古典のなかでは『医心方』中の一四九の処方以外にはほとんど見られず、これまで注目されることはなかった。ところが近年の新出土資料によって、これを再検討しなければならないことがわかった。

『五十二病方』は前漢の文帝十二年(前一六八)に築造された馬王堆三号墓から出土した帛書である。この処方集には、破損のため全く判読不能のものやまじない、灸、外科療法に関するもの以外に、薬物を使用する処方が二三六含

まれているが、そのうちの六五方に治法で処理することが指示されている。二三六のうちにも破損がひどくて薬物についての記載部分が十分に読めないものが約五十あるから、この方法を用いた処方の数はもっと多かったと考えられる。武威の医簡は後漢初期(二世紀)の墓のなかで発見された処方集である。このなかには短い破片状になったものなどを除いて、薬物治療の処方が三一あるが、そのうちの二三に治法が用いられている。治法はこのほかに『流沙墜簡』に収められた玉門閼附近出土の医簡でも用いられていて、漢代に広く用いられた方法と考えられる。この治法を用いている処方では、『五十二病方』では劑型不明の十八を除いた四七処方中、粉末劑と膏劑(外用であるが現在の膏薬とは必ずしも一致せず、粉末状にしておいて使用時に油脂類と混合するものも含む)、丸劑が合計四二で、浸出乃至煎出して使用する処方では五方に過ぎない。また武威の医簡では一丸の散劑(うち一種は水とまぜて塗布)と三種の丸劑はすべてこの方法で処理することが要求され、煎劑と膏では咬咀によることが指示されている。このようなことから、治法が生薬を細かく粉碎する方法であることは間違いないであろう

う。

い
う

『医心方』中の治法を用いた処方箋は主として六朝時代（三六世紀）に著わされたと考えられる二十の処方集から引用されていて、一〇八が散劑で三九が丸劑である。これらのうちには単に治または治合としてあるものもあるが、治篩または治下篩などとしたものが多い。このほかにこの処方集には一五の治篩、治合篩などとしたものもある。治法を用いていない丸、散では搗（搗）法が用いられ、治と搗（搗）を併用しているものもある。安政版の『医心方』では治にツクとかクタクという仮名がふつてある。

『千金要方』には治法を用いた処方箋はないが、治法を用いているものが三七六あり、そのうちの三二九が散劑で、九が丸劑である。また単に治としてあるものもあるが、三五六では治下篩とされている。ところが『千金翼方』では搗法はよく用いられているが、治法を用いたものは七処方だけで、しかも治下篩は一回しか出現しない。また『外台秘要』には治下篩としたものが一つあるだけで、そのほかには治法を用いたものも治法を用いたものもなく、『医心方』で治法を用いていた処方箋と同じと考えられるものでは

搗とされている。

以上のことから、治法は漢代の代表的な粉末製造法であったと考えられる。その具体的な手法と搗などとの違いは明らかでないが、『医心方』の訓みは恐らく正しいであろう。この粉末は最初はそのまま用いられていたが、大きさの揃った細かい粉末を得ることが要求されて、篩が導入されたと考えられる。治下篩などはその時期のものである。更に篩を使うことになる也未必しも治法を用いる必要はなくなつて漸次搗法に移行し、それにつれて治法の意味もわからなくなつたのであろう。他方、治は書写の際に治と誤られやすい。『医心方』中の治がそれを示すものであろうが、『千金要方』の場合には、恐らく治は誤りであると考へて積極的に治に改めたのであろう。治下篩が大部分を占めていることから、孫思邈が意識的に統一した可能性がある。『千金翼方』で治法がほとんど出現しないのは、高宗の諱を意識した可能性があるが、処方箋の冒頭には治の字が書かれているものもあり、なお検討を要する。『外台秘要』は恐らく諱を避けて、治法の治または治は搗に、治療の治は療に改めたと考えられる。このように治の字は製

劑技術だけでなく、現存医学古典の成立の事情についても問題を提供していることがわかったが、現状では『医心方』の方が『外台秘要』より、底本の良否は別として、原典の姿をより忠実に伝えていると考えてよいであろう。

有持桂里の墓碑銘および過去帳と

その漢方医学について

原 桃介

有持桂里（一七五八—一八三五）

有持常安、号は桂里また毓春園ともいう。名は希藻、字は文磯という。阿波の人で、十九歳の時京都に上り、医学を三角法眼に学び開業した。文化九年知恩法親王の侍医となり法橋に任ぜられた。天保六年（一八三五）享年七十八歳で没し、称名寺に葬られた。称名寺は現在、京都市中京区裏寺町通り蛸薬師下ルにある。

演者は称名寺の有持桂里の墓に参詣し、その墓銘を写したので、それを次に掲載する。墓銘の誤は、貫名包（ぬきなしげる）号は海屋で、江戸末期の儒者、書画家である。やはり阿波の国の人で同郷の誼で墓銘を撰述したものである。書は風韻の高い書風で幕末の三筆の一人といわれる。現在、多くの書家がこの墓銘の書を見学を訪れているそう